

五月頃だったか、軽傷の者、元氣回復者は再度労働へ、我々全治皆無者はダモイ東京とのこと。詳細は忘却だ。帰って地図を見て、ソ連と北朝鮮との国境辺りのポセツト湾より船に乗り、北朝鮮の茂山という所へ臨時在住して約一カ月過ぎして南下、咸興へ下がり約二週間位、興南港へと。いよいよダモイ、日本へと港へ誘導されるが、再びソ連へかと心中動揺しつつ行くも日の丸のついた船が目映る。あれだあれだと乗船する。天候よし、波風よし。動き始めると南へ南へと航進する。二日間位か、次々と小島とか松の木とか、久しぶりに竹林が見えてくる。まさに九州航路だと安堵感充滿だ。そして着いた所が長崎の佐世保港だ。

軍隊での数々の数奇を回想しつつ、帰還後は多少の巡回の中、満六十六歳まで元気に職業を重ねつつ、現在は厚生年金と軍隊、シベリアの傷病年金を受けながら満八十歳の昨今なり。

種々記載いたしたいこと山積しておりますが、

その一つ一つを列記することは最早老境に達し削除いたします故、悪しからず御放念賜りますようお願い、筆をおかせさせていただきます。

乱文乱筆を併せて御容赦下さい。

## シベリア抑留記

滋賀県 小杉 良夫

生い立ちから入隊まで

私は、大正十三（一九二四）年五月二十五日、近江八幡市馬淵町、福永太左衛門の六男として出生。小学校三年生の一月、母死去。昭和十二（一九三七）年馬淵小学校卒業後、義兄（姉の夫）の経営する三中井百貨店の本店のある朝鮮京城（ソウル）府に行き、昭和十六年十一月京城公立商業学校を繰上げ卒業して、昭和十七年四月、三中井百貨店奉天（瀋陽）支店に入社。その後、大邱店へ転勤。昭和十九年十月二十日、現役兵とし

て歩兵第八〇連隊補充隊第二中隊に入営しました。

入隊後、ソ連軍の侵攻まで

昭和二十年一月一日付で甲種幹部候補生となり、京城軍管区歩兵第三補充隊第二中隊に転属。その後、昭和二十年七月十三日付で朝鮮軍教育隊に分遣され、八月十六日、鎮南浦日本チツソ工場社宅の警備につきました。

ソ連軍の侵攻

信じられない敗戦の報を聞いたのも束の間、ソ連軍の不意の侵攻に、なす術もなく武装解除を受け、平壤（ピョンヤン）三合里の収容所に連行された。その後、昭和二十一年七月ポセット経由でシベリア鉄道を貨車に乗せられ、二十二日間荒野を走り続け、着いた所はウズベキスタンのベグワード収容所であった。

抑留中の過酷な労働の日々

収容所での生活は筆舌に尽くし難い苦労の日々であった。ダム工事に従事させられ、深さ二十メートル、底幅五十メートル、延長十キロメートルにも及ぶ運河採掘工事で、昼夜八時間三交代、二千人単位で作業に従事させられた。収容所内の生活はきびしく、地下壕で寝起きしていたが、零下二五度から三〇度の中で、朝は重湯、昼は黒パン三〇〇グラム、夜はお粥、飢えと寒さと病気で次々と亡くなり、収容時の二千人が、働ける者が約半数、死亡者と罹病者が半数という有様で、全くこの世の地獄だった。働ける者もノルマが課せられ大変だった。雨が年に七日位、一日一時間程度はどしゃ降り、その他は年中晴天である。作業は半砂漠地帯の中で毎日続く。遠くに天山山脈の雪が見えていたのが今も目に浮かぶ。

シベリアで待機

昭和二十三年九月、冬の訪れを感じる頃、帰国

の報を受けウラジオストックに向かったが凍結し、また一年間シベリア生活を余儀なくされた。シベリアでの生活は、零下四〇度の酷寒の中でコルホーズ（集団農場）に五十人程度派遣され、冬は馬鈴薯<sup>ジャガイモ</sup>の芽かきや選別作業、飲料水や食糧、暖房材の調達が主な作業であった。シベリアの収容所に入ってから栄養失調で体力がなくなり、シラミがわき、朝起きると何やらモゾモゾすると思ったら、隣の人が死んでいてシラミがこつちに移ってくるのだ。一部屋二十メートル位、入り口にストーブが一つあるだけで、大変寒い。やっと五月に春がきて、麦、砂糖大根、馬鈴薯の種蒔きや生育作業をさせられた。

ジャポンスキー、ダモイ

昭和二十四年九月、ソ連兵が「ジャポンスキー、ダモイ」と言い、帰国を知らせてくれた。待ちに待った引揚げだ。九月三十日ナホトカを出航、十月三日舞鶴に上陸した。

ああ、やれやれ日本に着いた。皆、歓喜し、抱き合って喜んだ。涙が自然に流れ出る。コスモスの花咲く道を復員局まで歩いた記憶は、今も忘れられない思い出である。

復員局でGHQから質問や調査を受け、上陸一週間後の十月十日ようやく解放され、兄の出迎えを受け、馬淵の我が家に帰ることができた。

## 労苦調査

広島県 平本 直行

一、出生から入隊

- ①大正十四（一九二五）年十一月二日、広島市観音町に生まれる。昭和十六（一九四一）年三月二十五日、満州電信電話株式会社大連社員養成所卒業（後、大連通信学校）
- ②牡丹江電信電話局通信課勤務、一心寮（独身）